Rakuno Gakuen University

酪農学園だより

Vol.143 新春号

聖句

その後　わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。
あなたたちの息子や娘は預言し　老人は夢を見、若者は幻を見る。

ヨエル書3章1節

酪農学園の時代を創る

理事長　谷山　弘行

酪農学園の活動にご支援をいただいております皆様、新年明けましておめでとうございます。

理事長として酪農学園の発展のために、心して取り組んで参りたいと思います。

昨年は、自然災害の多い年でした。４月の熊本・大分の地震に始まり、東北北海道における台風・水害と長引く天候不順、加えて鳥取県における地震など多くの国民が苦しみました。特に熊本県には地震と水害の二重の苦しみが与えられ、現在でも続いております。学園では竹花学長の指揮の下、被災地出身の学生にはできる限りの支援を行い、安心して勉学に励むことのできる環境を整えてまいりました。

少子化による人口減少、産業構造の変化による長引く経済不況、社会制度改革の大幅な立ち遅れなどが問題視されていますが、これらは学校経営にも影響を与えています。特に18歳の人口減少は大きな問題です。その年の新生児の数は18年後の学校経営戦略を左右します。したがって、学園の経営戦略には18年間の見通しを持つ必要性があります。現在の学園の姿は18年前の経営戦略の結果とも言えます。一方で、近年の新自由主義政治による規制緩和を始めとする社会改革は、当初の目的とは異なり、社会の歪みを生み出し、格差社会を拡大しました。富裕層と貧困層の二極化、すなわち経済的中間層の消失は学生の学費支援者（保護者）の貧困化を招き、修学資金に困窮する学生が激増しました。しかし、政府は何の対策も講じていません。それどころか、私学支援の予算はついに10％を割り込もうとしています。

酪農学園は「神を愛し、人を愛し、土を愛す」三愛主義を建学の精神としてきました。「宇宙の摂理を探究し、ともに生きる隣人を認め、人類の生きる礎である土を尊ぶ」の教えであります。酪農学園に集うすべての人々が等しくこのことを受け入れ、私たちに託された責務を果たす澪つくしとして心に止めおいていただきたい。さらに、「健土健民」思想は、現在の人類がもっとも苦しんでいる食の問題「農業の危機」を解決する唯一の教えであります。田中正造の教えにあるように、農業なくして人類は生きながらえることはできない。酪農学園は「健土健民」の教えに基づきこれまで多くの英知を培ってきました。この時代にあってこそ、酪農学園の「建学の精神」は光を放ち、世界に普遍的思想となる可能性を持っています。われわれはもう一度、原点に立ち返り、未来を見据えて人類の幸福に貢献する術を模索し、実行に移して行かなければなりません。私たちが協働して汗をかく時代が来たと信じるからであります。

堅実な歩みと信頼を築く

学長 竹花 一成

新年おめでとうございます。皆様には機会あるごとにご協力いただき心より感謝申し上げます。

学長として１年半が過ぎ、昨年４月には2016年度事業計画として大学改革の柱となる点を示し、関係部署の協力の下進めております。就任時に大学改革（教育の質の保証・ガバナンス強化）について「学部教育を主体とする本学は、学生の将来の可能性を育む場所である。大学の教育は探求の上に成立し、研究と普及活動がその教育内容を保証する。これを成し遂げるために、教員は社会との接点を常に持ち、社会に必要とされる知識と技量を身に着ける努力を常に怠ってはならない」と表明し、この達成のため単年度目標を策定し進めております。第１に学士課程教育を充実するため(1)各科目の役割を明確にし教育効果の検証を行う。(2)地域の人口減少・少子高齢化から「酪農とその周辺領域を担う“職業プロ”の養成」を自負する大学として、“専業酪農家の後継者の減少”、“農業法人の増加や複合化･多角化の進展”などの社会変化に迅速に対応できる備えをする。(3)教員の資質向上のために業績集の発行、昇格基準の明確化、大講座制導入の検討を行う。(4)教学組織の課題として動物薬開発研究センター（仮称）新設の検討、および附属動物医療センター、教育センター、就職部、入試部、エクステンションセンター、附属図書館、フィールド教育研究センター、農業環境情報サービスセンター、教職センターの再整備を行う。第２に大学院における教育・研究の充実のために(1)研究科の統一に向けての検討、(2)大学院教育の実質化の推進、(3)研究不正に対する取り組み強化、を実施しました。

教育の質を継続的に引き上げ、学生からより信頼を得られる大学を目指し、特にそれぞれの学群、学類の３つのポリシー（アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー）を明確にし、それに見合ったカリキュラム改訂、続く改組に向けて進めていきます。酪農教育を核とした教育の再構築、基盤教育において、必修科目の強化設定を行う事で、全学基盤教育の強化を図っていきます。

「教育とは不完全な教員と不完全な学生が共に作り上げるもの」樋浦誠先生の言葉の意味が今、良くわかります。大学教育の本質を皆様の意見を取り入れて再度強く築き上げ、学園全体がより社会の評価を得るために教職員の先頭に立って尽力いたします。今後も変わらぬご協力をよろしくお願い申し上げます。

健康減塩レトルト食品 レシピプレゼン大会で学生6名が受賞

(一社)地域健康社会研究所と(株)ベル食品が主催する「健康減塩レトルト食品レシピプレゼン大会」の学生部門の結果発表が7月25日に行われ、本学大学院・酪農学研究科修士課程1年の髙橋宗一郎さん(臨床栄養管理学研究室・石井智美教授)が、大賞を受賞しました。考案したレシピは、ごはんにかけるタイプ部門の「減塩チリコンカン」です。

また、食と健康学類3年(管理栄養士コース)の5名が、準大賞を受賞しました。森伊歩希さん(給食経営管理学研究室・小林道講師)、芦崎和航さん(栄養学研究室・松野一彦教授)、栗原隆悟さん(公衆栄養学研究室・安川澄子教授)のグループが、ごはんにかけるタイプ部門の「トマトとつくねの親子丼」、スープ部門の「たっぷり根菜のミルク坦々スープ」部門で準大賞を受賞しました。宮本彩加さん(給食経営管理学研究室・小林道講師)、甲斐みづきさん(同研究室)のグループが、ごはんにかけるタイプ部門の「1日分の野菜!どさんこキーマカレー」で準大賞を受賞しました。

日本細菌学会北海道支部学術総会で 佐藤友美さんが最優秀発表賞を受賞

9月17日に北海道大学で開催された「第83回日本細菌学会北海道支部学術総会」において、本学大学院・獣医学研究科博士課程2年(当時)の佐藤友美さん(食品衛生学研究室・田村豊教授)が発表した「牛及び食肉由来メチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA)の特徴とヒトへの影響」が、最優秀発表賞を受賞しました。受賞した発表は、家畜由来のMRSAがヒトの健康に影響を及ぼす可能性を指摘したもので、食品衛生における重要な知見が評価されました。

また、食品衛生学研究室出身で、現在は北海道大学大学院保健科学研究院の助教を務める大久保寅彦さん(獣医学研究科博士課程2015年修了)が、「北海道大学病院にて分離されたニューデリー・メタロベータラクタマーゼNDM-5産生大腸菌の性状解析」で優秀賞を受賞しました。

日本動物看護学会第25回大会で 小倉美咲さんが奨励賞を受賞

7月2・3日に本学で開催された「日本動物看護学会第25回大会」において、本学大学院・獣医学研究科獣医保健看護学専攻修士課程2年の小倉美咲さん(動物理学療法研究室・椿下早絵准教授)が、一般演題発表の部(口頭発表)で奨励賞を受賞しました。

小倉さんが発表した研究「四肢麻痺を呈し頸部椎間板ヘルニアと診断された犬の術後リハビリテーションの一例」は、頸部椎間板ヘルニアを発症して四肢麻痺となり、自力起立および歩行が不可能になった12歳の柴犬の、手術後のリハビリテーションについてです。飼い主との連携を密にして、より良いリハビリ方法を見つけ出すことで、症例は術後26日目に自力歩行が可能となり、36日目にはほぼ正常に日常活動ができるようになりました。

日本景観生態学会で上原裕世さんと本間詩織さんが受賞

本間さん　　上原さん

環境共生学類のPDフェロー（当時）の上原裕世さん（野生動物保護管理学研究室・吉田剛司教授）が発表した原著論文「エゾシカ(Cervus nippon yesoensis)の高密度化により林床植生の改変した森林景観におけるヤブサメ(Urosphena squameiceps)の繁殖適応」が、日本景観生態学会の2016年度論文奨励賞を受賞しました。この賞は、学会誌『景観生態学』に発表された論文の中から、景観生態学における学術・技術の進歩、発展に寄与し、独創性と将来性に富むものと認められた若手研究者に授与されるものです。

また、本学大学院・酪農学研究科修士課程2年の本間詩織さん（同研究室）が、7月8日～10日に本学で開催された「日本景観生態学会 第26回北海道大会」においてポスター発表した「北海道の人工的な湿地景観における外来種トノサマガエルの繁殖時期の解明」が、ポスター賞を受賞しました。

医療系ｅラーニング全国交流会で萩原祐太郎さんが奨励賞を受賞

9月10・11日に本学で開催された「第11回医療系eラーニング全国交流会」において、獣医学類6年の萩原祐太郎さん（獣医放射線生物学ユニット・遠藤大二教授）のポスター発表が、奨励賞を受賞しました。

萩原さんが受賞した研究発表は、「疾病症状データベースと病因ネットワークを利用したPBL学習方法」です。PBL（Problem Based Learning＝課題解決型学習）とは、与えられた課題について、学習者自らが問題点を抽出して、議論を進めながら解決手段を見出し、課題を解く学習方法です。通常は、1つの学習グループに主に教員がチューターとしてつき、課題を解くための助言を行いますが、人員の確保が難しい面がありました。萩原さんは、プログラムがチューターの役割を果たすことのできるシステムを考案しました。

第22回「野生生物と社会」学会大会で栗木隼大さんが優秀ポスター賞を受賞

11月4日～6日に東京農工大学で開催された、第22回「野生生物と社会」学会大会において、本学大学院・酪農学研究科修士課程1年の栗木隼大さん（野生動物生態学研究室・佐藤喜和教授）が、優秀ポスター賞を受賞しました。

受賞した研究は、「ヒグマの市街地侵入地点は予測できるか―出没防止のためのリスク評価の試み」です。札幌市は、190万人を抱える大都市と、ヒグマの生息域である森林が隣接する特徴的な環境にあり、これまでは稀だったヒグマの市街地への出没が近年多発していますが、その出没情報についての詳細な研究解析はなされていませんでした。栗木さんはそこに着目し、2010年から2014年までの5年間の742件について解析を行い、森林が市街地に凸状に突き出している地域（凸状地）はヒグマが出没する可能性が高いことなどを示唆しました。

第72回北海道家畜人工授精技術研修大会で高山茉莉さんが奨励賞を受賞

10月13・14日に札幌市のホテルさっぽろ芸文館で開催された「第72回北海道家畜人工授精技術研修大会」において、本学大学院・酪農学研究科修士課程2年の高山茉莉さん（家畜繁殖学研究室・堂地修教授）が、学生を対象に授与される奨励賞を受賞しました。

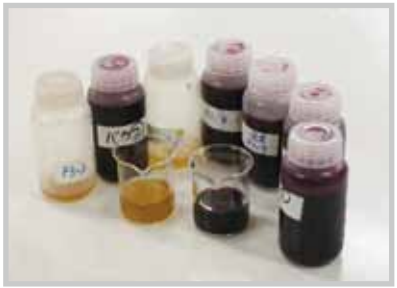
高山さんが発表した研究は「ホルスタイン種および黒毛和種のOPU-IVF成績に年齢が及ぼす影響」です。ホルスタイン種および黒毛和種の雌牛から、生体卵子吸引法により採取した卵子用いて体外受精して受精卵を生産する技術（OPU-IVF）において、雌牛の年齢が受精卵の生産率に影響するかどうか検討しました。その結果、OPU-IVF成績には、年齢よりも牛ごとの差が大きいことが明らかになりました。今後も研究データを積み重ね、有用な技術情報を、酪農家や肉牛農家、関係者に提供し続けたいと考えています。

学生たちが育てた日本短角種が北海道知事賞（最優秀賞）を受賞

「北海道肉専用種枝肉共励会」が11月11日に、帯広市内で開催され、日本短角種の部に出品した肉畜生産ステーション肉牛農場（江別市元野幌）の夢来安26（28.4カ月齢）が、最優秀賞である北海道知事賞を受賞しました。

本農場では11月1日現在、黒毛和種65頭とともに日本短角種14頭（繁殖牛8頭、肥育牛4頭、子牛2頭）を飼養しています。日本短角種は粗飼料の利用性や放牧適性が高いことから、繁殖牛は夏季に放牧し、肥育牛は自家製のビール粕サイレージの多給と自場産の牧草飽食により、購入濃厚飼料の給与量を可能な限り減らす試験に取り組んでいます。今回共励会に出品した去勢牛は、ビール粕サイレージ3割、飼料米2割、濃厚飼料5割、粗飼料飽食により育てました。今回の枝肉は、ロース芯が大きく形も良く、短角種としては脂肪交雑が高く（BMS No.4）、枝肉重量（524kg）も十分なものでした。

酪農学園大学オリジナルワインの試験醸造を開始



食と健康学類では、地域の農産物を使い、微生物のもつ機能を活用して食品を製造する研究を行っており、今年度から、発酵学を学ぶ学生への教育、発酵現象の探求研究を目的として、地元のブドウや酵母を使ったワイン作りに向けて、研究を開始しました。

2015年9月に、酒類の試験醸造免許を受け、その後、各研究室では、市販のブドウ、リンゴ、ナシ、カキを原料として、購入した醸造用酵母を使いワイン（果実酒）やシードルの試験醸造を行うほか、バラや小果実から分離した酵母でワイン（果実酒）を試作しています。

将来的には、学園内で栽培されたブドウと学内で採取した酵母を使って、本学の特徴を活かしたオリジナルワインの醸造を目指しています。

泉賢一教授が2016年度北海道畜産草地学会賞を受賞

循環農学類の泉賢一教授（ルミノロジー研究室）が、2016年度北海道畜産草地学会賞を受賞しました。この賞は、北海道の畜産および草地に関する試験・研究および農畜産業への普及・指導に顕著な業績を挙げた会員に贈られるものです。

受賞した研究内容は「乳牛におけるルーメンマット構造の定量とその形成およびルーメンマット機能を活かしたTMR給与法に関する研究」です。乳牛の第一胃（ルーメン）の内容物は堅いマット状の塊を形成しており、ルーメンマットとよばれています。ルーメンマットは乳牛の健康維持や乳生産向上にとって重要な役割を担っていると考えられていますが、その構造を把握する手法がなく、機能については推測の域を出ませんでした。

泉教授は、ルーメンマット構造の定量方法を確立し、様々な飼料を給与した乳牛でルーメンマット形成状況と生産性との関連を検討しました。その結果、ルーメンマットの堅さと厚さの積と反芻時間に、密接な関連があることを明らかにしました。

天野朋子准教授が、（独）日本学術振興会「平成28年度科研費審査委員」表彰

日本学術振興会では、学術研究の振興を目的とした科学研究費助成事業（科研費）を実施しています。科研費の審査は、第1段審査（書面審査）と第2段審査（合議審査）の2段階審査で実施されており、審査はすべて研究者の査読（ピア・レビュー）によって行われています。この科研費審査を公正・公平でより質の高いものとするため、日本学術振興会では平成20年度から有意義な審査意見を付した審査委員に対して表彰を行っており、平成28年度は約5,700名の第1段審査（書面審査）委員の中から268名が選考されました。

このたび、循環農学類の天野朋子准教授（家畜遺伝学研究室）が表彰され、平成20年度に本表彰制度が設立されて以降、本学の同審査委員経験者としては初の表彰者となりました。

第10回高校生による牛乳類を使ったお菓子レシピ表彰式を開催

本学が全国の高校生を対象に募集した「第10回高校生による牛乳類を使ったお菓子レシピ」において、336点の応募の中から入賞9作品が決まり、最優秀賞（酪農学園大学学長賞）に「かぼちゃチーズタルト」北海道三笠高等学校3年の佐々木美里さん、優秀賞（セコマ賞）に「5層のオレンジ牧場」愛知啓成高等学校2年の新谷菜月さん、同じく優秀賞（光塩学園調理製菓専門学校校長賞）に「キャラメルムースタルトのモーっちりクレープ包み」とわの森三愛高等学校3年の武井柚香さんが選ばれ、7月23日に開かれたオープンキャンパスにおいて実演審査と表彰式を行いました。

過去最高の12作品が商品化される共同発表会を開催

入賞レシピは、本学との産学連携の取り組みにより、（株）セコマが8品、札幌グランドホテルが4品を商品化され、10月から約1カ月間販売されました。

第14回ザ・地産地消 家の光料理コンテストで学生3名が佐作を受賞

（一社）家の光協会とJA全国女性組織協議会が主催する「第14回ザ・地産地消 家の光料理コンテスト」において、循環農学類3年の諸山蕗さん、内田映美さん、熊野枝里香さん（食物利用学研究室・宮崎早花助教）のグループが、佳作を受賞しました。

このコンテストは、地域内自給率の向上、地産地消料理の開発と普及をすすめることを目的としており、今回の「素材を生かしたスイーツ部門」では、地元でとれる野菜や果物などを素材に使った、家庭で手軽に作れるデザートを募集しました。受賞したレシピ「しゃっきり!さっぱり!山わさびどら焼き」は、江別産の山わさびとレタスを使ったどら焼きです。すりおろした山わさびを生クリームに混ぜ込み、濾した後、その中に茹でたレタスを入れました。

諸山さん　内田さん　熊野さん

冬季アジア大会の料理レシピコンクールで学生が受賞

吉野さん　宮武さん

冬季アジア大会「HOT・ほっと北海道料理レシピコンクール」の最終審査が11月12日（札幌地下歩行空間での一般投稿）と13日（札幌エルプラザでの実演）に行われ、食と健康学類3年の吉野浩世さんと宮武希衣さん（食・健康スポーツ科学研究室・山口太一准教授）が考案した「筋肉焼売（しゅうまい）」が審査員特別賞を受賞しました。

第44回毎日農業記録賞に3名が入賞

毎日新聞社が主催する、「農」や「食」、「農に関わる環境」への思い、体験、提言をつづる作文コンクール「2016年度（第44回）毎日農業記録賞」の入賞作品が11月3日に発表されました。

全国1,304編（一般部門264編、高校生部門1,040編）の応募の中から、一般部門の地区入賞に、循環農学類2年の勝部菜々瀬さんの「おはぎが教えてくれたこと」、同3年の添田愛実さんの「大好きな“トマト”が教えてくれたこと」、同3年の髙橋千佳さんの「わたしの農業人生」が選ばれました。

第37回牛乳・乳製品利用料理コンクールで熊野枝里香さんが優良賞を受賞

平成28年度「第37回牛乳・乳製品利用料理コンクール」の実演審査が、10月21日に札幌エルプラザで行われ、「酸乳酪湯（サンニュウラクタン）」を調理した循環農学類3年の熊野枝里香さん（食物利用学研究室・宮崎早花助教）が優良賞を受賞しました。

熊野さんが考案した「酸乳酪湯」は、酸辣湯（サンラータン）という中華料理のスープに、ヨーグルトを使用したものです。肉だんごに水切りヨーグルトを混ぜ、水切りした際にできるホエー（乳清）を、酢の代わりに使用して酸味をつけました。

附属動物医療センター完成

附属動物病院本館の改修工事と臨床獣医学教育研究棟が完成し、本学附属動物医療センターとして学内での完成お披露目会を7月7日に行い7月8日にグランドオープンしました。

伴侶動物部門の、猫専用の待合室や8つの診察室、広い処置室、超音波検査室、内視鏡検査室、CT検査室、MRI検査室、X線検査室、臨床検査室、放射線治療室、画像読影室、集中治療室、隔離入院室、画像手術室、リハビリテーション室などの施設を見学しました。続いて、生産動物部門の牛診察室・手術室、馬麻酔導入覚醒室・手術室、検査室などの施設、また、獣医学共用試験に対応するvet OSCE室を見学しました。

獣医保健看護学類の教員と学生が米国パデュー大学で初研修

米国パデュー大学獣医学部の国際プログラムオフィスによる、学生と教員の交流事業により、獣医保健看護学類の郡山尚紀准教授（動物行動生態研究室）、同学類4年の海野愛さん（動物理学療法研究室・椿下早絵准教授）、桜井新之助さん（臨床疾病治療研究室・嶋本良則教授）の3名が、7月16日～29日までの2週間、同大学で研修を行いました。

パデュー大学は、獣医学部の中に獣医学科と獣医看護学科が併設され、付属教育動物病院では、両科の合同によるチーム医療を学ぶことができます。本学の学生が研修を行うのは今回が初めてで、海野さんと桜井さんは、同病院の全診療科で実習を行い、米国での動物看護師の仕事の内容、現状、仕事に対する姿勢などを学びました。

動物愛護フェスティバルinえべつ2016

本学と江別市小動物開業獣医師会が主催する「動物愛護フェスティバルinえべつ」（約40団体参加）が、9月25日に本学で開催され、ペット連れの家族など約4,000人が来場しました。

今年のテーマは『いざというときに～ペットの災害対策～』で、災害が起きたときにペット同伴避難ができるように日頃からの心構えと準備について、本学獣医保健看護学類の学生がデモンストレーションを行うイベントを中心に、動物とのふれあいを楽しむ企画が行われました。

第11回三愛賞・第7回特別三愛賞授賞式を開催

獣医学科同窓会が、顕著な功績を挙げた同窓生を表彰する第11回「三愛賞」、並びに本学獣医学科および同窓会の発展に寄与した教職員（OBを含む）を表彰する第7回「特別三愛賞」の授賞式が、10月7日に本学学生ホールにて開催され、獣医学科同窓生や教員、学生、学園関係者、約100名が出席しました。

授賞式では、南繁獣医学科同窓会会長より、第11回「三愛賞」を受賞した黒崎尚敏氏（（株）トータルハードマネージメントサービス（THMS）会長、獣医学科1977年卒業・第10期）と、第7回「特別三愛賞」を受賞した田坂隆美氏（獣医学科家畜公衆衛生学初代教授1966年就任、1996年退職）の功績が称えられ賞状と盾が贈られました。

第25回ホームカミンデーを開催

第25回ホームカミンデーが9月17日に開催され、約100名が参加しました。

同窓生会館前の駐車場でのランチバーベキューのあと、黒澤記念講堂にて、記念礼拝（物故者追悼）、特別講演会が行われました。

講演会には、神奈川県鎌倉市在住の食品科学科2期生の大橋厳太氏を講師に迎え、「ブランド」をテーマに「ハーゲンダッツジャパン」生産部マネージャーとしてさまざまな製品開発上の経験から「ハーゲンダッツ」のポリシーやおいしさの秘密、アイデア等「ブランド」を維持するための創意工夫等をご紹介いただきました。

第20回 白樺祭

6月25・26日に開催された2016年度「第20回白樺祭」は2日間雨に見舞われたのにも関わらず、5,125人もの方々にご来場いただきました。

白樺祭実行委員長の栗本翔太さん（食と健康学類2年）は、「今年のテーマは『華』です。今年度第20回の節目を迎え、白樺祭という大きな“ハナ”が開花しました。白樺祭という花は毎年毎年次世代へと種を残しパワーアップしてきました。来場者の方々にも白樺祭が30回、50回、100回と次世代の種が無事に成長するようお力添えください」と、開会のあいさつをしました。

白樺祭20周年企画として、同窓生会館の2階に、黒澤酉蔵翁の生い立ちをパネル展示しました。また、黒澤記念講堂で行われた特別講演には、本学の卒業生で花畑牧場を経営する田中義剛さんをお招きして、学生時代の話から牧場経営、チーズ作りにかけた思いを語っていただきました。会場には、恩師の安宅一夫教授や、学生時代に田中さんの隣のアパートに住んでいた竹花一成学長、たくさんの卒業生が駆け付け、当時の生活ぶりに思いをはせ、終始笑いに包まれました。

機農コース

農業クラブ収穫感謝祭報告

大焼肉大会

10月1日に、保護者・家族約170名、機農コース生徒115名、教職員10名以上と300名に迫る人数の参加のもと、収穫感謝祭が盛大に開催されました。

礼拝堂でのオープニング後、意見発表披露、3年生より欧州酪農研修報告、そして1、2年生の生徒・保護者を対象に、来年度以降の欧州酪農研修旅行の説明会が行われました。

その後、グラウンドでは「地区別運動会レク」が実施され、綱引きやリレーを行い総合優勝は「チーム釧根・道北」が、クラス対抗リレーでは「3年1組」が優勝を獲得しました。

希望寮前では「大焼肉大会」が行われ、大多数の参加があり、大いに盛り上がりました。差し入れをしてくださった保護者の皆様、ありがとうございました。

また歴史あるこの行事が、無事盛況の中閉幕することができ、関係各位に心より感謝申し上げます。

施設見学と共進会報告

むらかみ牧場にて酪農体験

9月23日、機農コース行事では、午前中に全学年共進会場を見学し、午後から1年生はむらかみ牧場（恵庭市）、2年生はGEAオリオントレーニングセンター（千歳市）、3年生はコーンズエージー工場を見学し、それぞれの学びを深めました。

共進会場で行われた、北海道ホルスタインナショナルショウでは、ジュニア2歳クラスで2等賞、ジャージー種未経産ジュニアクラスで1等賞3席とそれぞれ入賞を果たしました。そして、リードマンコンテストでは、高校3・2年生の両部では、上位3位までを独占しました。

フードクリエイトコース

韓国研修旅行を実施

昌徳宮にて

2年生は、10月18日～22日に、韓国研修旅行を実施しました。前年は、伝染病MERSの影響により南九州研修旅行となったため、2年ぶりの韓国行きとなりました。

食文化など日本と類似する点がある一方で、独自の文化も持つ隣国韓国。キムチやコチュジャンなどの料理体験を通して韓国の食文化を学び、独立記念館、韓国民俗村、昌徳宮、青瓦台見学を通して平和や歴史について考え、学校交流を通して文化の違いや類似点を知り、市場見学やスーパーマーケットでの買い物を通して韓国経済の勢いを見ることができました。

今回の研修旅行では、18名が長時間ともに過ごし体験することで、より仲間意識や団結力を高めることもできました。これから自分たちの将来を考えていく上で、広い視野で世界を見るきっかけとなる、大変有意義な旅行となりました。

総合教育コース

台湾研修旅行を実施

桃園市私立治平高級中学校との交流

2年生は、10月18日～23日に台湾研修旅行を実施しました。「discovery in Taiwan～かけがえのない最高の一瞬を～」を旅行テーマとして、中国語圏である台湾の歴史と文化を学び、2年次の必修科目である基礎中国語で学んだことの実践、4クラスでの旅行で集団行動における責任や協力体制も意識して研修を行いました。

台北市内の研修では前年に続いて天候に恵まれ、忠烈祠や九份、淡水なども素晴らしい景色を見ることができました。また、故宮博物院では館内の撮影が許可され、有名な展示物を撮影しながら、生徒たちは目を輝かせていました。

桃園市私立治平高級中学校との交流では、歓迎セレモニー、授業体験、スポーツ交流と生徒それぞれが積極的に活動しました。

最終日の自主研修では、班ごとに計画した場所へ現地の大学生ガイドと共に台北駅から出発し、ホテルへ帰着するまでの1日を有意義に過ごしました。

旅行中はどの生徒も全てにおいて積極的に取り組み、今後の生活や将来に向けて大きな財産を得た研修となりました。

獣医進学コース

沖縄研修旅行を実施

美ら海水族館にて、
植田さん（三列目中央）を囲んで

10月18日から4泊5日で実施しました。主な目的は、獣医師の仕事を実感し、自らの生き方についての考えを深めること、沖縄の自然環境や文化に触れる中で課題発見・解決能力を高めることです。具体的には、美ら海水族館やネオパークオキナワ、琉球大学、嘉数高台公園、沖縄国際大学米軍機墜落現場、佐喜眞美術館などを訪れました。生徒たちはメモを取りながら熱心に話を聞いていました。特に美ら海水族館の植田獣医師は獣医学部のOBであり、後輩にあたる生徒たちには熱意を込めた講話をしていただきました。生徒たちはその想いを受け止めながら熱心に話を聞き、大変感動し、また自分自身の生き方や獣医師への思いを新たにしていました。

さらに天気にも恵まれ、シュノーケリングも体験し、沖縄の美しい海を間近で見て、水棲生物の生態や環境問題等を考える機会となり、生徒たちは北海道では味わえない感動を得ました。

アドバンスコース

ベトナム研修旅行を実施

日系企業のPLUS社を訪問

2年生は、10月18日～23日にベトナム研修旅行を実施しました。

18日～20日は北部ハノイにて昔ながらの街並みであるドゥンラム村見学や伝統芸能である水上人形劇の鑑賞、20日～22日は南部ホーチミンにて日系企業PLUS社への訪問や語学学習に力を入れているLe Phong Hong高校交流などを行いました。PLUS社ではベルトコンベアー型生産方法は効率が悪く、今は個人で組み立てていると現場を見ながら説明していただき、日本人社長からベトナムへ進出した理由、苦労した点などを直に聞くことができました。また、Le Phong Hong高校交流では英語に特化したクラスの語学力の高さ、新設されたばかりの日本語に特化したクラスの勉強への強い意欲に驚かされました。そして私たちももっと学習しないと世界に遅れをとるという危機感を持ちました。

これらの研修旅行は、ベトナムの文化・経済・教育を学び、国際的な幅広い視野を持つ良い機会とすることができました。

トップアスリート健康コース

関東研修旅行を実施

筑波大学　野生の森にて

10月18日～21日に関東研修旅行を実施しました。

初日は大学・実業団チームの練習に参加・見学し、進路プランの一助とすること。

2日目は「ディズニーシー」へ行き、日頃様々なプレッシャーで疲れきった心と身体をリフレッシュさせること。3日目は「筑波大学・野性の森」にて、各グループで課題克服に挑戦し、グループワークから論理的発想、想像力、団結力、信頼感などを磨き、自己理解・他者理解につなげること。4日目は「スカイツリー」へ行き、世界一高い電波塔からの眺め、スケールの大きさを体感。また午後からは「よしもと」へ行き、観客を楽しませる表現力（言葉・身体・道具等）を間近で体感すること。今年度コースで力を入れている活動の1つに、スポーツ交流・ボランティア活動があります。まさに、この「よしもと」の体験は、それらの活動に繋がり、皆を笑顔にし、心を豊かにしてくれるものでした。

それぞれの目標を達成させるべく、生徒たちは元気一杯参加していました。これらの経験が今後の活動の大きな原動力になる、大変素晴らしい充実した3泊4日の研修旅行となりました。

通信制課程

通学コースの宿泊研修　青い池訪問

通信制課程には現在、通学コース・通信コース合わせて55名の生徒が在籍し、酪農学園の自然豊かな環境の中で伸び伸びと学んでいます。生徒たちは、農作業や食品加工の実習をはじめ、様々な取り組みの中でお互いを大切にし、ゆっくりと成長する時を共有しています。これこそが「もう一つのとわの森三愛高等学校」としての着実な学びと歩みです。

各コースでは、北海道の自然を体験するプログラムや文化・歴史を学ぶ研修旅行も実施しています。7月には、通学コースは南富良野町・富良野市でラフティングや渓流釣りを体験。通信コースは、集中スクーリング後半に北海道の各地を訪問し、パラグライダーや乗馬体験などに取り組みました。両コースとも、自分自身の成長や自信を持つことができるプログラムに取り組むことで、新しいことにチャレンジする意欲を育んでいます。前向きな姿勢は、学校祭や動物愛護フェスティバルでのオニコロ販売などの校外活動においても活かすことができました。

すべての結果は自分に返ってくる ～スポーツクライミングとの出会い～

2020年に開催される東京オリンピックの追加種目に決まった「スポーツクライミング」。その競技人口は国内で約60万人、世界で約3,500万人とも言われています。ここ数年でロッククライミングやボルダリング（ロープ・防護服なしで素手で岩を登るスポーツ）が気軽に体験できるレジャー施設が増え、こどもから大人まで楽しめるスポーツとして人気を集めています。このスポーツがあまり一般的には知られていなかった頃から、海外に渡り「岩（かべ）」登りに挑戦し続けてきた萩原亜咲さん。W杯日本代表選手であり、HFA（日本フリークライミング協会）の副会長として北海道代表のユースの指導者としても活躍する彼女が今、本当に伝えたいことを伺いました。

夫のPAXさんと保護犬（雑種）のファン君、ヒョウモントカゲの2代目家政婦のミタちゃんの家族で暮らす

ボルダリングジャパンカップ2016日本代表選手

萩原（はぎわら） 亜咲（あさき） さん

環境システム学部 生命環境学科（2期生）2010年卒業

プロフィール

1987年北海道函館市生まれ、10歳のときに倶知安町に引っ越す。
14歳のときに倶知安町にあるＮＡＣ（ニセコアドベンチャーセンター）でクライミングと出会う。当時、倶知安高校に通いながら、週末は札幌市内のジムや恩師となる元北海道山岳連盟副理事長の奈良憲司コーチ（美唄工業高校）のもとで練習に励む。
2005年、第8回JOCジュニアオリンピックカップ大会で優勝。
大学1年生のとき、2006年クライミングアジア選手権台湾大会の日本代表として出場。結果、リード女子の部９位、ボルダリング女子の部10位と初出場ながら健闘する。
W杯には2009年から2016年まで12回出場。
大学３年生のとき、2008年第63回国民体育大会「おおいた国体」山岳競技・成年女子ボルダリング種目で２位に入賞。その後13年連続で出場し、３度の優勝経験を持つ。
2013年、HFA（日本フリークライミング協会）副会長に就任。
2013年、札幌市手稲区にロッククライミングジム「ボルダリングパーク・ウィッパースナッパージム・ウィップス」をオープンさせる。

東京オリンピック

夏にオリンピックの追加種目に決まってから選手たちの日常は大きく変わったと思います。良くも悪くもスポーツクライミングが注目されていることを実感させられます。

私自身はオリンピックが全てではないと思っています。これまで大会に出ても人と競うという気持ちはなく、数字（戦績）を見て勝敗を考えることもありませんでした。ただ、全力で壁に向かい、ひたすら「クライミングを極めたい」という思いでした。

今年は30歳になります。最近では体もきつくなり、体力でカバーできない分、今まで蓄積してきた技量で補う「術」が分かってきました。

そして今、このスポーツの本当の魅力を伝えていきたいと思っています。

もともとは自然の岩を登るロッククライミングが原点です。命に関わる危険と隣り合わせのスポーツです。反面、そのスリルが魅力でもあります。それが人工壁であっても危険だということを認識する必要があります。単にレジャー感覚で体験を勧めることはできません。

教え子にはいつも「すべての結果は自分に返ってくる」と話します。きっかけは何となくやってみようでも良いです。でも、気楽にやるのと本気で取り組んだ結果は違います。本気の人はかっこいいし、それを見ている周りも目的意識を持つようになります。自然とこどもたちも親から離れ、上手な人から教わろうとより多くの大人と関わろうとします。ジムに通う者同士が感化され、良いつながりができるのも見ていてうれしく思います。

クライミングの形にも時代の流れがあります。大会のタイプによっても変わってきます。最近では、体全体を使う体操系の動きが主流になっています。選手としてどう動くか、指導者としてどう伝えるか、どちらの立場も理解でき、いろいろな面でクライミングについて知ることができる今の環境が一番いいポジションだと思います。10代から壁と本気で向き合い、いろいろな人と出会い、世界を見て、自分の頑固さも客観的に受け入れられるようになり、人の立場になって考えられるようになってから、自分のクライミングのスタイルが見えてきました。

北海道大会で上位の成績を持つ小学生から高校生までの指導に当たる

2009年南アフリカにて

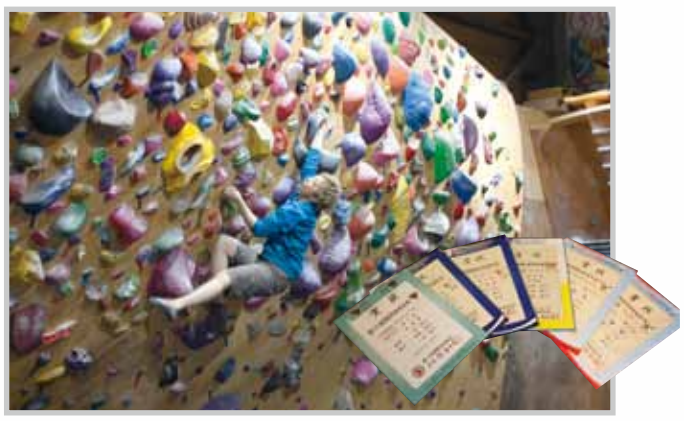
大学時代

自然や動物が好きだったので生命環境学科（現環境共生学類）を選びました。特にエキノコックスの研究に興味があったので神谷先生のゼミに入りました。

大学2年のときに、大学での勉強が面白くなる一方で、クライミング一本でやっていきたいという思いが強くなり、大学を続けるか迷いました。両親に相談したときに、大学時代にしかできない経験があると言われ、長い夏休みを利用して南アフリカやスペインなど海外へと渡り、自然の岩を登りに行きました。そして人生観が変わりました。自然環境を学ぶこととクライミングとのつながりのようなものが見つかり、勉強もやりたいことも両立することができました。そして、大学時代の友達との出会い。それぞれの道へ進んでも、お互いに刺激しあえる良い関係は、やはり大学時代に築けた財産です。

後輩へ

はじめは長く続けると思わなかったことも、何がきっかになるか分からないものです。自分の求めていた答えではないかもしれないけれど、何かやってみてください。興味がないものでも本気で向き合えば結果は自分に返ってくるはずです。大学時代にしかできないことを見つけるため、限られた時間の中でどうしたら一生懸命になれるのか考えてみてください。



「酪農大生チャレンジプロジェクト（略称：酪チャレ）」が始動

本学学生生活援護会は、本年度より「酪農大生チャレンジプロジェクト」を開始しました。正課外（単位となるゼミや授業以外）活動の中で、学生自らが自由な発想でプロジェクトを企画・立案し、その実現のための創意工夫や、問題解決のための討論を行い、創造力の醸成やコミュニケーション能力の向上を図ることを目的としています。学生・院生が考案したアイディアを実現するために同会が支援し、10万円を上限に資金援助を行います。本年度は4本のプロジェクトが採択され、実施期間は2017年3月31日までです。

プロジェクト名「繋がれ!!未来を担う酪農家」

団体名「酪農の和を広げ隊」
食と健康学類2年 髙木洋旗さん（代表）
獣医保健看護学類3年 井上絵里加さん
循環農学類3年 久我真雪さん
循環農学類2年 古里琢磨さん・内海直輝さん・那須俊紀さん・山口真緒さん・幸可奈子さん・大圖真由子さん
循環農学類1年 福地脩平さん・田中耕平さん

離農者の増加や農業へのマイナスイメージから、現在、若者が農業離れしている。そこで、酪農後継者や新規就農を志す者同士での交流の場を作る。農業の将来を担うもの同士が、お互いを高め合い、さらにはパートナー探しの手助けとなることを目的とする。
アイスブレイク（初対面の人同士などが打ち解け合うために、ゲームやクイズなどをすること）での交流や、グループワークでの話し合い、情報交換の場を作る。

プロジェクト名「酪農学園大学 想いよ届けProject」

団体名「酪農学園大学 WAKKA」
循環農学類1年 長谷川千夏さん（代表）・武川桃佳さん・神尾咲希さん・成田小雪さん

『酪農学園大学』と『江別市』をテーマに、フォト・イラストコンテストを開催し、コンテスト受賞作品でポストカードを作り、販売する。利益は、国連WFP（国際連合世界食糧計画）レッドカップキャンペーンに寄付する。ポストカードの売り上げで、世界の飢餓に苦しむ子供たちへ、給食を届けることができる。食に関わる酪農学園大学が、食の国際貢献をすると同時に、本学と江別市の魅力を発信する。

プロジェクト名「酪農アスリート弁当（Rakuno Athlete Bento）プロジェクト（RABプロ）」

団体名「食・健康スポーツ科学研究室」
食と健康学類3年 髙橋梢さん（代表）・田原文香さん・柳沢愛美さん・今村文音さん・池田成美さん・吉野浩世さん・宮武希衣さん・八田早那子さん
食と健康学類4年 佐藤未来さん
酪農学研究科博士課程2年 東郷将成さん・保科圭汰さん

学生アスリートは、食事の重要性への理解が乏しいため、十分な食事がとれていない傾向にある。そこで、学生アスリートが適切な栄養をとれる弁当レシピを提案する。まず、有識者に弁当を試食して評価してもらい、それをもとに改良を行い、弁当レシピを作成する。そのレシピを使い、体育会幹事会との合同企画で、本学の体育会系クラブのアスリートを対象に料理教室を行い、簡単に作れる弁当レシピを提案する。

プロジェクト名「ESD 自然エネルギー普及推進プロジェクト」

団体名「真冬にあつあつソーラークッキング!」
環境共生学類3年 大森希美さん・大槻奈緒子さん・水谷あゆみさん
環境共生学類2年 品川裕太さん

昨今では、原発問題や震災、環境問題などで、自然エネルギーに注目が集まっている。国際的な開発援助に用いられているソーラークッキングツールは、廃材から造られ、自然エネルギーで薪の消費を抑え、森林の保全や地域の自治力向上に貢献している。このプロジェクトでは、12月～1月の数日、大学内でソーラークッキングツールのワークショップを開催し、国際情勢と自然エネルギーの関係を知るきっかけを作る。ソーラーについてのポスター展示を行い、冊子などを配布するほか、ソーラークッキングツールで温めた試食も配布する。

学校法人酪農学園の役員改選が行われ、寄付行為第25条第1項第2号に規定する同窓生枠の評議員として推薦した以下の方々が選任されました。

高等学校　浅野政輝氏
短期大学　黒澤敬三氏
大　　学　小山久一氏、南　繁氏、上村篤正氏、下田尊久氏

○高等学校同窓会の動向

第15回を数える酪農学園高等学校関東甲信越地区合同同窓会が、11月20日午後1時から酪農学園東京オフィス（東京交通会館11階）を会場に開催されました。

本学からは浅野政輝高校同窓会長、榮忍校長、真田昭好副校長が出席しました。

12月3日とわの森三愛高校2期生同窓会が開催されました。

○短期大学部同窓会の動向

6月4日、短大Ⅱコース5期生同期会がホテル網走湖荘で開催されました。

6月27日、短大五期会「第15回同期の集い」が札幌ジャスマックプラザホテルで開催されました。

8月7日、短大Ⅱコース1期生同期会が新さっぽろアークシティホテルで開催されました。

8月21日、元酪農学園同窓会連合会会長（初代短大同窓会会長）の高橋節郎氏がご逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

○大学同窓会校友会の動向

・準会員（学生）向けの応援企画として6月に日替わり丼（酪農牛乳付）を200円で提供し、好評でした。（詳細は校友会報23号参照）
・シリーズ酪農学園の精神（10）が刊行されました。

表題は「酪農学園の精神」シリーズを終えるにあたって一新たな「酪農学園の精神」の方向一。

工藤英一名誉教授に執筆いただきました。（変形A5判49頁）。

なお「酪農学園の精神」は10号をもって最終号となります。

○酪農学園同窓会 熊本・大分地震義援募金 結果について

熊本・大分地震で被災した酪農学園同窓会会員へのお見舞いの目的で、7月1日～8月31日の期間に実施した募金総額は765,984円でした。

ご協力いただいた全国の同窓生に紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。

なお、義援募金は11月13日の熊本県支部総会においてお見舞金としてお渡ししました。

○地区支部同窓会等の動向

・支部設立関係

中国地区島根県支部設立準備会を11月27日開催しました。

・地区総会等

5月8日、関東東甲信越地区総会交流会（岡田勉会長）を九十九里浜「サンライズ九十九里」で開催。

6月12日、九州地区支部長会議（理事会）を博多市内ホテルで開催。

8月6日、九州地区連合同窓会を宮崎市内の「ホテルメリージュ鳳凰」で開催。

10月1日、近畿地区幹事会を京都市「聖護院御殿荘」で開催。

10月16日、中部地区支部長会議を富山市「グランテラス富山」で開催。

11月19日、北海道第三（道南）地区会を八雲町で開催。

・支部総会

全国各地で開催された支部総会については紙面の都合上、下記の同窓会ホームページ、QRコードからご覧願います。

・職域OB会・クラブOB会・同期会

今年度も職域OB会（教員OB会緑風会、開業獣医師OB会酪小獣）や体育系クラブOB会、文化系クラブOB会、高校、短大、大学の同期会が多数開催されております。詳細は同窓会ホームページからご覧ください。

酪農学園同窓会十勝支部総会のご案内

■ **日　時：2017年1月21日（土）11時～13時**
■ **会　場：若竹会館**

議　題：支部総会　事業報告、事業計画審議　等

終了後昼食懇親会（会費3,500円）
十勝地区在住で総会・懇親会にご出席いただける方は、同封の返信用葉書により、氏名、ヨミ、所属（大短高）、連絡先等と、**「1月21日」「十勝支部総会」**と明記の上、1月17日（火）までにお送りいただくかrg-dosok@rakuno.ac.jpまでご連絡をお願いします。

お知らせとお願い

住所変更された同窓生の方は、下記のいずれかの方法で、同窓会事務局までご連絡ください。

● TEL：011-386-1196
● FAX：011-386-5987
● e-mail：rg-dosok@rakuno.ac.jp
● 〒069-8501 江別市文京台緑町582
　酪農学園同窓会事務局
URL:http://rakuno.org/ ご覧ください。

人の動き

【退　職】

2016年７月31日付け発令

大　学	食と健康学類	講　師	田上　貴祥

2016年８月31日付け発令

大　学	教育センター教務１課	主任主事	中野　亮子
	EXセンター国際交流課	課　長	高橋　直樹

【兼務解任】

2016年９月30日付け発令

戦略本部	戦略本部	局　長	近　雅宜 内部監査室室長の兼務を解く
事務局	常務理事付部長	部　長	関　浩一 EXセンター事務次長の兼務を解く

【昇　格】

2016年10月１日付け発令

大　学	EXセンター	事務次長	江口　祐子 （前.学園広報室課長）
	学務部学務課	課　長	藤田　肇 （前.就職部就職課主任主事）
	入試部入試課	課　長	岩森　昭憲 （前.入試部入試課課長補佐）
	附属家畜病院事務課	課　長	髙山　基樹 （前.附属家畜病院事務課課長補佐）

【異　動】

2016年10月１日付け発令

大　学	教育センター教務１課	課　長	岩井　繁和 （前.事務局財務課課長）
	教育センター教務１課	主任主事	長谷川　泰子 （前.学務部研究支援課主任主事）
戦略本部	戦略本部	課　長	漆原　滋 （前.教育センター教務１課課長）
学園広報室	学園広報室	課　長	加藤　浩 （前.入試部入試課課長）
事務局	財務課	課　長	中港　康裕 （前.戦略本部課長）

訃報

学園教職員一同、生前のご功績をしのび、心よりご冥福をお祈りいたします。

髙橋　節郎様（85歳）
2016年8月21日逝去
元酪農学園副理事長
（1999/7～2007/6）

阿部　光雄様（85歳）
2016年8月2日逝去
酪農学園大学名誉教授
在職期間（1965/4～1999/3）

らくらく健身術 「鮭の豆腐ソースグラタン」【料理編】

食と健康学類 栄養指導論研究室
杉村　留美子 准教授

寒い季節には温かい料理を囲むと心も身体もほっとします。そこで、この冬におすすめの一品「鮭の豆腐ソースグラタン」をご紹介します。豆腐ソースは材料をミキサーで合わせるだけの簡単ソースで、通常のホワイトソースよりも手軽に失敗なく作ることができます。また、鮭に含まれるアスタキサンチンには強い抗酸化作用があり、老化や病気の原因となる活性酸素の消去に働きます。“食べる美容液”ともいわれる鮭の機能性に注目して、熱々のグラタンと一緒に寒い冬を乗り切りませんか。

〔材料〕4人分

- 生鮭　300g（4切）
- じゃがいも　100g（中2個）
- たまねぎ　50g（1/4個）
- しめじ　50g（1/2株）
- オリーブオイル　12g（大さじ1）
- こしょう　少々
- 溶けるチーズ　50g

《豆腐ソース》

- 絹ごし豆腐　300g（1丁）
- みそ　36g（大さじ2）
- 水　15g（大さじ1）
- オリーブオイル　12g（大さじ1）

〔作り方〕

1. 鮭は一口大に切る。じゃがいもは半分に切って1㎝幅の半月切りにし、フライパンでゆでてザルにあげておく。玉ねぎは5㎜の薄切り、しめじは石づきをとっておく。
2. 《豆腐ソース》をつくる。みそは水で溶いておき、全材料をミキサーにかけて、なめらかになるまで混ぜ合わせる。
3. フライパンにオリーブオイルを熱し、鮭の両面に軽く焦げ目をつける。たまねぎを加えて少し色づくまで弱火で炒め、しめじを加えて加熱する。最後にじゃがいもを加え、こしょうで風味付けし、2の《豆腐ソース》を加えて全体にからめる。
4. グラタン皿に油をぬり（分量外）、3を入れて上からチーズをのせてオーブントースターで10分焼き、美味しそうな焦げ目をつけて完成。

（1人分）エネルギー281kcal、たんぱく質24.5g、塩分1.5g

聖句解説　酪農学園大学　宗教主任　榮　忍

旧約聖書の預言の言葉です。神の霊が注がれるその時には、老人は夢を、若者は幻を見るというのです。しかしわたしたちは、夢や幻を持ち続けることを許さないかのように現実に引き戻されます。今、世界に見えているのは、争いや欲望の渦巻く現実ではないでしょうか。

21世紀を「バラ色の未来」と幼い頃に思い描いていた人も多いと思います。確かに、コンピュータの発達は生活を変えてきていますが、厳しい現実は続いています。この聖書の言葉は、キリストの復活の後、キリストを伝え始めた福音伝道の歩みにおいても確認されています（使徒言行録2章17節）。苦しい現実は確かにあるけれど、神の導きがあるときには、周囲からの人間的評価を超えて、預言し、夢を見、幻を語る者が現れます。無味乾燥で味気ない言葉でなく、内面に隠れていた神に与えられた力が現れ、希望へ導かれるのです。

今、この聖書の言葉が生きて、わたしたちが真の夢・幻・希望を語り出すことを追求する歩みを共にいたしましょう。

酪農学園だより Vol.143
2017.1.15

発行:学校法人酪農学園
酪農学園大学／大学院／とわの森三愛高等学校
編集:学園広報室
〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582
TEL（011）388-4158　FAX（011）388-4157
HPアドレス:http://www.rakuno.ac.jp
E-mail:koho@rakuno.ac.jp
印刷:社会福祉法人 北海道リハビリー

※本紙の内容を無断で複写・複製（コピー）することを禁じます。